

---

# スライムの咆哮

ミコト5121

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スライムの咆哮

### 【Nコード】

N7676J

### 【作者名】

ニコト5121

### 【あらすじ】

気が付いたら知らない森の中、人間だったはずの俺の体はスライムになっていた！？。これは最弱の生物として異世界で生き抜くことになった不幸な元人間の綴る滑稽で、でもいつも必死だったというお伽噺

作者は初心者のため文章力が低いです。それでも読んでくれる方には精いっぱい感謝を

## 最悪の始まり

俺は今、森の中に居ます。

だからどうしたと指摘されると、とても困りますが……

雑多な木々が生い茂り、太陽の光が僅かにしか地面に零れない様は、20歳の頃から都会勤めの俺に大自然の偉大さを感じさせてくれます。

オウ、耳を澄ませればギャアギャアと怪しげな鳥の鳴き声らしきものも聞こえてくる……

此処まで深い緑の空気を吸ったのは、何時以来だろうか……

……双子の姉と故郷の山に入って迷子になったのが最後だったかなあ  
あの時は、親父と爺ちゃんが鬼のような顔して怒られたっけなあ  
雷のようなお説教が始まってから20秒で姉に責任を押し付けられたのは今となつては、良い思い出だよな……

此処に居る理由？ こっちが知りたいよ。

気が付いたら此処で気絶していたのですから。

……でも、正直、気が付いたら知らない場所に居たことも  
……それが薄暗い森の中だったこともどうでもいいのです。

……いえ……実際の所は……そこまで頭が回らな

いのです。

目線を下にやるとそこにあるのは、粘性のある液体……

しかもその色はエメラルドグリーン

そんな外見に似合わず、この液体は強力な酸で構成されているらしく、

落ち葉や小さな虫なら一瞬で溶かすことも可能みたいです。

簡単に言ってしまうえばグリーンスライムですね。

ゲームの序盤で散々、殺される魔物界最底辺のあれですよ。

……ああ、そうだ、誤解を招く前に言っておきますが、

このスライム君は目の前に居るわけでも、足元に倒れているわけでもなく

俺自身のことだったりします。

………なあんじややややややこりやややややや………!!!

## 最悪の始まり（後書き）

初めて投稿させていただくミコト5121です  
文章力が低いため分かりにくくテンポも悪いかと思いますが、それでもまだ読んでやろうという寛大な方がいらっしやいましたら感謝  
感激です。

最後まで頑張りますのでよろしくお願いします

## 02 チュートリアル 移動と戦闘

『…うづう…なんで俺がこんな目に……』

枯れたような声だったがこの姿でも音を発する事が判ったので鬱モードに入る。

鬱モードと言っても木に向かって独り言を呟くだけだが。

状況は最悪だった。体は上手く動かすことが出来ず、此処が何処なのかも判らず、周囲は確実に暗くなっていく。

(夜が近いのか…クソッ…考えも纏まらないのに…)

最後に最も優先しなければならぬ事を思い浮かべる。

(まずは…体だ…元の体がどうなっているのか知りたいけど…今はこのスライムの体を使えるようにならないと、この先、どうなるのか分からない…)

意識をして体を動かさそうとしてみると大きく揺れることが出来た。

(思ったよりも動けるな…次は…移動が出来るかどうかだよな…あれをやってみるか)

さらに意識を集中してあるモノをイメージしてみると4本の触手が生えてくる。

(これ以上は生やすのは無理か…しかし本当に化け物だよな、これ)

触手の1本を試しに振ったり、伸ばしたりしてみたが強度と操作性は悪くない。

（犬みたいに走れば上等なのだけど、無理だな）

四足の生き物ように歩こうとしたが移動以前にバランスが保てずに倒れてしまう。

試行錯誤しているうちに長時間立てるようになったが、此の俣、歩くのは今日中には無理そうだった。

（まいったな…いい考えだと思ったのだが…嫌な予感もするし、早々に安全な場所を探したいがなあ）

周囲を見渡すが、完全に日は落ちている。

加えて、夜の冷気に混ざって、何かの目線まで感じるようになった

（急がないと…そうだ、別に歩く必要は無いんだ）

触手を限界まで伸ばすと、6〜7メートル程まで伸び、こんどはそれを太い木の枝に巻きつける。

『上手く歩けるようになるまでターザンの真似ごとだな』

触手を巻きつけた木が酸で溶けて煙が出ているが素早く次の枝に移れば大丈夫だろう。

触手を縮めてまずは、体を浮かす…1瞬、逆上がりの要領で反動をつけて跳ぼうとしたが、やめた。

失敗して落ちたら確実に《勇者のこん棒》並みの衝撃が待っているはずだ。

本格的に昇ろうとしたときに、今まで感じていた嫌な予感が濃厚になる

ビギイイイイイイ！！！！！！！！！

『！？』

行き成り茂みの中から突っ込んできた《黒いモノ》ぎりぎりで避け、必死になって触手を縮ませて木の上へよじ登る。

『……………ブタ！？ いやイノシシか！？』

体当たりが失敗したと悟ったイノシシは素早くこちらを見上げて様子見をしているかのように木の周りを旋回している。

人間の体の時なら、此の俣、イノシシが諦めるまで木の上で待っているのだが、この身はスライム……………強力な酸で己の足場を溶かしながら崩してゆく。

『待て！！待て！！溶けるな！！頼むから溶かすな！！！！』

意味のない絶叫で終わるはずだったその声に応えるかのように木の枝から煙が消える。

（止まった……………？……………これで落ちずにすむのか！？）

安堵にした拍子に重心をずらしたことで酸のダメージを受けていた枝が軋む音と共に落下の秒読みを始める

（……………助かったとおもったのに……………クソッ……………こうなれば覚悟を決めるか！！！！！！）



着地と同時に襲いかかってくると思われるイノシシに意識を向ける  
ビギイイキエエエ！……！！

予想通りに突進してくるイノシシと正面から4本の触手を使い、受け止める

(あっちのほうの力のほうが強い……！！……くう！?)

奮戦空しく弾き飛ばされた俺の体の中からイノシシは何かを探すようにして前足で抉り始める。

『イタイイタイイタイト……この……ブタが……！！』

触手を首に巻きつけて反撃しようにも大した効果は表れない

(このままじゃやられる……なんでこいつ酸が効かないんだ!?)

そこでようやく木の上で自分の意思で酸をコントロール出来たことを思い出す。

『本当に俺の思った通りだったら簡単だ……!?!?』

意識を触手に集中する

「さつさと溶ける……!!!!ブタ……!!!!」

先程の木の上と同じく、その声に応えるように状況が変化する。ただし、触手に絡めとられたイノシシにとっては最悪の展開であるが。

盛大に煙を上げ、頭と胴体を繋ぐ首が無くなったことでイノシシは動かなくなる。

俺はそれを見てから意識を手放した。

## 02 チュートリアル 移動と戦闘（後書き）

とりあえず2話目 拙い文章に赤面しながら投稿してみる

### 03 チュートリアル イベントと会話(前書き)

久々の投稿!! 石を投擲される覚悟はできています(泣き

### 03 チュートリアル イベントと会話

『…………朝か、どの道、死ぬけどな、俺…………』

目が覚めたのは、朝日が照らし始める30分前のこと、俺を出迎えてくれたのは、倒れる前に倒したイノシシの生首と僅かにしか動かすことができないスライムの体だった。

(…………いきなりスライムになった挙句、イノシシと相討ちって笑えないな)

再度、触手を動かそうとしたが、やはり僅かにしか動かせない。それどころか確実に弱ってきているように感じる。

(…………なにか、何か方法はないのか、訳もわからず死ぬしかないのか、ふざけるな!?)

心の呪詛は誰にも届かぬまま、霧散していく。

(…………あゝ、無理か…………クソツ)

スライムに成り下がった時点で俺の死は確定していたのだろうと諦めようとして気がつく。

(…………!?!? そうだ、今の俺は化け物になっているんだ、人間に出来ないような能力があるかもしれない)

そう考えてから、スライムになってからの事を思い出し始める。

(……諦めるのは、死んだあとだ、まだ俺は考えられる!!)

20分後

『……今のままだと、詰むな、意味不明だな、このスライムのスペックは……?』

あれから色々試した結果……以下の事が判った

- 1つ目、全方位を一度に視る事が出来る
- 2つ目、痛覚や触覚を意識的に遮断できる
- 3つ目、触手の形をある程度、変形できる
- 4つ目、別に触手を足にしなくても本体のまま、地面を滑るように移動できる

(……全部……体力が残っていて怪我していなければ意味があったかもな……)

周りを観察すると少し離れた場所に花畑があった。

『花か……まあ、死に場所としては悪くないかな……?』  
「此処で死なれても困るんですけど……」

何処かから聞こえた声は幼い少女のようだが、姿は確認できない。

(馬鹿な、今の俺には死角がないのに、何処から聞こえる!?)

「あの……出来る限り早く、移動してもらえないかな……」

再度、声の聞こえた方向を注意深く見ると、なぜか空気が揺らめい

ている。

『そこか！？ 喰らえ！！！！』

「！？ キヤツ！」

触手を鞭のように放ち、ナニ力を捕獲することに成功する

その際に残っていた体力を残らず、使ってしまった事に後悔する前に妙なことに気が付く

『……………あゝ、これは、なんだろう』

触手を巻きつけた先にあつたのは姿のない何か、だが確かに暖かな温もりを感じる。

「え、なんで、消えていたのに捕まるの!？」

『うわ!!』

突然、響いた声に驚いてつい、触手を振るとガラスが割れたような音がして、声の主らしきものが姿を現す。

「……………なんで、なんで!？」

捕まえたモノをまじまじと観察すると、それは奇妙な生物だった。形は人間、しかしサイズは子供の人形ほど、身に着けているのはポロボロの布と葉っぱを組み合わせた物で到底、服としての機能を果たしていないように見える。だが、ポロボロの服が気にならなくなるほどの特徴が、触手を振りほどこうとしている奴にはあつた。

『羽……………?』

「いやああああ、放してええええ!!！」

必死になって暴れている羽付き人形が泣きながら叫んでいるが、気にせずに拘束を掛けたまま放置する。

(……ほかに手も無いし、こいつを利用するか)

見えてきた希望に心躍りながらも巻きついた触手の中で暴れ疲れている生物に話し掛ける

『……なあ、奇妙な生物、ちょっと相談事があるのだが』

「……ッ、奇妙な生物って私のことですか!？」

『その通りなのだが、なにか自己主張でもあるのか?』

「何なんですか、その言い方は、私の姿見れば、妖精族だって分かりますよね!？」

(妖精って言われてもなあ、まあ、今の俺がスライムだから何でもいいか)

喚いている妖精を本体近くまで寄せると、途端に大人しくなって泣きながら怯えている。

『どうした、妖精、さっきまでの威勢の良さはどうした』

「……だって、食べるつもりですよ……私のこと」

力なく、どこかこんな不幸なことには慣れていているような口調で妖精は呟いた。

抵抗するつもりもないのか遠い目をしながら独り言をするかのよう  
にブツブツと言っているが、どうやら本当に独り言のようだった。

「大体、なんで私がこんな目に合わないといけないのかな、元の住



処が奴らに奪われた時も誰も助けしてくれなかつたし、それまで一生懸命、精霊様のお手伝いしていたのに、肝心な時には見捨てられたし、こんなお花畑の蜜を集めているだけじゃお腹一杯にはならないし、魔力も減って魔法使えなくなるし、……こんな所にまでブログが出てくるし、秘薬使って姿消したのになんか捕まるし、その挙句、奇妙な生物って言われるし、……最悪だよ、しかもブログに食べられて終わりって笑い話になるよね、確実に……」

(……いろいろと悲惨な目に遭っているな、この妖精……、ん？奪われた？精霊？魔法？秘薬？)

いきなり重要そうなワードが出てきてほくそ笑むが、流石に気まぐしくなつて触手から解放したが妖精はそれに気が付かないままブツブツと独り言を続けている。

(まずは優しくしてやってから交渉しますかねっと)

『なあ、妖精、俺はお前を食べる気が無いから、とにかく落ち着け』  
「……別にいいですよ、そんな言葉信じて、最後には裏切られるって学習しましたから」

『取りあえず、さつきから触手の拘束は解いているから、……それで信用してほしい』

ぱつと顔あげて目を丸くし、変なものを見るかのように俺を見つめてくる。

「本当に……なにもしないんですか？」

「ああ、本当だ、俺はただ君の力を貸してほしいだけだ」

### 03 チュートリアル イベントと会話（後書き）

次回は早めに書きます（土下座）

#### 04 チュートリアル 回復と浄化(前書き)

ふう、今回も何とか投稿できたよ、ああ、健全な生活に戻りたいよ。あ、そうそう、R15作品がどーだのこーだのというお知らせが来たので一旦削除してから再投稿することになるかも……その折はよろしく願います。

## 04 チュートリアル 回復と浄化

6歳)

Side シア (不幸な妖精)

目の前のプログさんはさっきまで触手で散々、締めあげていたくせにいつの間にか解放してくれていました。

『ああ、本当だ、俺は、ただ君の力を貸してほしただけだ』

……でこんなこと言ってきましたが、はっきり言って、胡散臭いです。

ええ、短いけど絶え間ない不幸と苦勞で濃縮された6年間の経験が最大級の警鐘をひびかせています。

「……私の力って言われても、大したことは出来ませんよ？」

『……そんなことはない、少なくともそこに転がっているイノシシよりは頼りになる』

それって誉められているのか、貶されているのか、よく分かりませんよー

……え、イノシシ？、何のことですか？そんなものこころに倒れているはずがないですよ。

「何かの勘違いじゃないですか、そう簡単に倒れる生き物じゃないですよ、ソレ」

『その木の陰、俺が倒した』

ああ〜これは末期ですね〜、妄想癖のあるブロブって歌って踊れる馬糞よりも性質悪いですね。

「そんなこと言って〜、何もありません・・・!?!」

あ、本当だ、居たよ、イノシシ、しかも頭と体が離されていますね  
……なんか傷口部分溶けていますし、かなり残忍な手口ですね。ア  
ハハ〜

「……………つて、キヤヤヤアアアアアア、し、死んでるつつつ!  
?」

Side スライム (元会社員 人間歴2  
5年、スライム歴2日)

(なんかいい感じに怯えてくれて、上手く行きそうだ フハハ)

『ああ、済まない、先にかなり酷い死に方をしていると言っておけば良かったのだが……怖かったか?』

悲鳴を上げた後、妖精は腰を抜かしてしまったらしくへなへなと座り込んで震えている。

「この、イノシシさんは、一体、誰に、殺られたんですか?」  
『俺が倒したのだが……生憎、こっちも怪我をしてしまったな』

青ざめた顔をしてぎこちなく振りむく妖精。

「ブっブっブロボがそんなこと出来るわけ　　!?!」

触手の先から溶解液を一滴垂らすと地面からジュツと音と煙が発生する。

硬直する妖精……恐らくは自分が溶かされる未来を思い浮かべているらしく、涙目になっている。

『安心しろ、俺は君に何もしない、それよりもさっきの独り言が偶然、聞こえてしまったのだが　　もし、俺に手を貸してくれるのなら……こっちも君の悩みを聞いてやろう……さて、どうする?』  
「わっ私の悩みですか、本当にできるんですか……プロブなのに……」

妖精は俺のことを疑いながらも目が血走っている。恐らくは期待しているのだろう

『プロブ?、違うな、俺はスライムだよ、さつきみたいに強酸も使えるし、触手も出せるから結構、君の力になれると思うぞ、……まあ2日前に生まれたばかりで色々知らないこともあるがな』

「2日前にですか!?!」

『ああ、だから君の他に頼りに出来る友人もないし、この世界について知っている限りのことを教えてくれれば、出来る限りのことはしてやろうと思う』

(まあ、あんまり面倒すぎる悩みだった場合……本当に聞くだけにするつもりだけどな……)

3分後……悪魔の囁きに首を縦に振る妖精の姿があった。

Side シア（悪魔に魂を握られたことに気が付いていない妖精 6歳）

「水？……それだけで回復するのか？、この体」

「はい！、お任せください、スライム様がブログの変異種であろうと、新鮮で綺麗なお水！！！！、これは絶対に効きます！！！」

ああ、私、今、最高に輝いているのかも知れません……ただのブログだと思っていた生物は……強力な酸と触手による多彩な攻撃を得意とするスライムという魔物でした。今までそんな種族聞いたことがありませんが、気にしたら負けです。

「あと、私のことは、シア、シアとお呼びください！！！」

『まあ、こっちは自分の体さえ満足に把握していないしな、……シアに任せる』

「畏まりました！！、すぐにご用意させていただきます」

やっと……やっと運気が上昇してきたのだとシアは全身で感じています。

まあ、簡単に説明しますとスライム様は2日前に生まれたばかりだとか、満身に体力を蓄える前にイノシシにいきなり襲われてしまったそうです。

それでも相討ちに持ち込んだのは、スライム様の気高いド根性の成せる技でしょう。

……ああ、でも、しかし、生後2日で会話できるってどんな化け物ですか、

しっかーし!!!、もっとも重要なことはスライム様がその死闘の中で手傷を負ってしまった事とその治療に私の力が必要なことです。

自分を売り込むために薬の調合や魔物の生態や治療に心得があると伝えたところ、中々の高評価をいただきました。

……生まれてからすぐに押し付けられてきた仕事の知識がこうして自分のために役に立つ時がこようとは……運命の神様も粋な仕事をするじゃありませんか。

『済まないが……出来る限り、早く調達してくれないと、何時、力尽きるか判らない……』

「!?!」

何ですと?、意外と重症ですと?、やばいです、急いで水と薬を持ってこないとオオオオオ!!!

Side スライム (ファンタジー初心者、スライム歴2日)

『……水が……水が、もう無いだと……!?!』

「ごっごめんなさい、今まで一人で暮らしていたから、水とか余分な貯蓄していなかったんです」

周りにはシアの住処から持ってきた大小合わせて10個位の瓶や革袋が散乱している



(……シア一人でこれだけの水を掻き集めてきたことには、感謝しないとな)

目の前で悔しがっているシアに多少、元気になったことをアピールするために触手を出して振ってみるが、何処か虚ろで乾いた笑みを浮かべながら涙を浮かべる不幸妖精

「さっきお出しした水は雨水を一旦加熱してから冷ましたもので、まさかこれで足りないなんて……」

『気にするな、ゆつくりとなら自分の力で近くの水場まで行けると思う 案内、してくれるか?』

「今のスライム様の状態だと2日以上掛りますよ、最寄りの水場……」

『死刑宣告と受け取ったぞ、その言葉』

諦めて空を見上げたが、雲ひとつない空は雨が降りそうな気配を微塵も感じさせない。

『水の他には効きそうな薬は無いのか?』

「私の薬はですね、最初に水分を必要だけ摂ったあとで、体調の安定化を促すものなのですよ……」

『……2度目の詰みか……ん?』

遠くで木々を縫うように歩く人影が見える。おそらく女性……このままではこちらに気が付かず何処かへ去ってしまうだろう。

『シア、あれをどう思う?』

「む、人間ですね、いい感じに利用しちゃいましょう」

『化け物を助けてくれると思うか?』

「あれは教会のシスターです、純粹培養の善意の塊です、聖書の中

にしか居ない神様の奴隷です、私たちにとって都合の良い慈愛に溢れたお方に違いありません!!!」

神様に雷に落とされそうな事を叫びながらシスター目指して飛んでいくシアを俺は無言で見送ることしかできなかった。

「……あ、そうそうシスターの前では喋らない方がいいです、下手したら見捨てられるかもしれませんから」

いきなり振り返って、真面目な口調で言ったシアは再び、飛んでいく。

『……あゝ、嫌な予感がするよ……』

Side シア (いつ雷を落とされてもおかしくない妖精 6歳)

「シスター!!!!!!」

「……な、何者です!?!」

フッフ、やはり教会のシスターで間違いは無いみたいです。

胸元の英雄ルシアのメダルが何よりの証拠なのですよ。

「私はこの森に住む青草の妖精リーフ・フェアリーのシアと申します、是非、シスターには救っていただきたい命があるんです!!!!」

ククク、この台詞で心躍らないシスターはこの世にはいませんよね

「!?!、わ、わかりました、まさか気高い妖精にそのようなことを

お願いされる時がこようとは、ああ、アルバーンの勇者になって本当に良かった……」

……「ゆうしゃ???、ああこれは末期ですね。妄想癖のあるシスターなんて手品が出来るゴブリン並みに笑い物になるでしょうに、一人でこの森の中を歩いていたのは教会から追放でもされたんですかね?、まあ、利用しやすくなったことには、神様に感謝しないといいけませんね。」

「これは、アルバーンの勇者様だとは知らず、私の非礼を許していただけませんでしょうか?」

「とんでもない、私は英雄序列683位の未熟者ですのでシア様に畏まれてしまつてはかえつて困つてしまいます」

……「はあ、683位ですか、妄想なんですから1位だと言つてもいいと思うのは私だけでしょうか。」

しかし、シア様ですか……いい響きですね。

「ではシスター、私に付いてきてください、すぐそこに貴女の力が必要な方が待つています」

「わかりました、……私のことはシスターではなくケティと呼んでください」

ケティと呼び捨てでいいんですね、フハハ、いい気分です。

……「冗談はここまでにしといて早く、スライム様の所に連れて行かないと……」

さあ、全力で戻りますか。

「これは……プロブですか?」

「いえ、この方はスライム様です」

スライム様をプロブと一緒にするなんてケティは何考えているんですか。全力で飛んで疲れていなければ、説教を最低でも1時間程度したい気分ですよ。

「あの……シア様、顔色が優れませんがシア様も体調を崩されているのでしょうか？」

「……ええ、最近、魔力が回復できていないもので、ちょっと頭痛が……」

「!?、それは大変、シア様、これをお飲みになってください、魔力を回復させるこのうががありますので!!!」

おお、教会印の魔力補給薬ですか……噂には聞いたことがありますよ、高価な薬らしいですね

「これはありがたいです、……スライム様にも早く救済の手を……」

ぷは、いいですね、ブルーポーション魔力補給薬ここまで魔力が戻ってくるのは1年ぶりです。

「判りました……我が聖印よ、大英霊ルシアの教えに基づき、彼の聖宝を顕現させ給え、《シーデイントの聖壺》」

なんですか!!!、眩しいです、目が潰れる所でした……

「そ、それは何ですか、……水差しのように見えますけど……」

ええ、そうです、ケティが閃光と共に取り出したのはなんかゴテゴテした装飾の付いた水差しでした……これってまさか　　!?

「これこそはわたしが勇者だという証、至宝召喚《シーデイントの聖壺》です」

勇者って妄想の産物じゃなかったんですか！！！！！！！！  
てか、そんな物持ちだしてどうするつもりですか！！！！！！！！

「だ、大丈夫ですよ、スライム様にそれを使っても……？」

「はい、大丈夫です、この《シーデイントの聖壺》の力ならスライムの救済が速やかに行えます……」

なんだ、回復系の道具でしたか……おお、今の私は運勢が絶頂みたいですね、スライム様に続き、聖具持ちのシスターに出会うなんて

「それは素晴らしいです、スライム様を早くお願いします」

「任せてください、……それでは、始めます」

おゝ、これが聖具の力ですか、水が掛った瞬間からスライム様の体が輝くなんて演出も忘れていませんねゝ

「おかしいですね、効いていない？」

いえいえ、そんなはずがないですよ、スライム様は気持ちよさそうにしていらつしやいますから……やっぱり、人間にはスライム様の表情がわからないようですねゝ

「初めて使う聖具ですが……いささか、伝承とは違うというのはどういうことでしょうか？」

伝承ですか……まあ、立派そうな聖具ですし、なにか大仰な伝説が残っていてもおかしくないですねゝ



#### 04 チュートリアル 回復と浄化（後書き）

ふはは、シアちゃんが暴走したね。ちょっとだけ

## 05 チュートリアル 武器と魔法(前書き)

てて様からご指摘を頂いたのでちょっとでも日本語に近づけられるように頑張って行きたいです。



## 05 チュートリアル 武器と魔法

いきなりだが、皆さんはテレホンパンチというものをご存じだろうか？

これは、ボクシングで使われる用語で、予備動作が大きすぎるために狙っている個所や、打つタイミング等を電話でお知らせしてしまっているかのようなパンチのことである。

……当然ながら、テレホンパンチを仕掛けられた相手としては回避や防御がしやすいため、反撃のチャンスとなりやすい。

プロや喧嘩慣れしている人にとっては、と言う話になってしまっただが……

素人がテレホンパンチで殴られる時に感じるのは、恐怖と威圧感のみだと、此处では語っておこう。

……それは、攻撃側が武器を使えば、なおさらのこと

天に向かって高々と振り上げられた凶器はウォーハンマー。  
装飾が施された鎚頭は太陽の光を受けて、妖しく輝いている。

「ハッ！！！」

必殺の気合いと共に、鉄の塊は一直線にゼリー状の生物に向かって振り落とされる。

「ス、スライム様、避けてください！！！」

『ムハアアアア！！！！』

戦鎧を振り切った体勢のまま、間一髪で避けたプロブモドキを一瞥してシスターは呟く。

「避けなくてください、当たらないじゃないですか」

『テ、テレホンハンマーを受けて死ぬとか、貴様、悪魔か！！！！』

この状況を説明するには時を幾らか遡る必要がある。とりあえず、10分ほど……

Side スライム (ヤラレ役転生した不幸な奴、スライム歴2日)

「ケティ、こちらです！！」

シアは飛び去ってから、すぐにシスターを連れて戻ってきた。

(上手く話を付けてくれたのか……シア、ありがとう)

シアに忠告されたように声を出さず、大人しくしている俺を見てシスターは不審がっている。

「これは……プロブですか？」

「いえ、この方はスライム様です」

シスターの問いにスライムだと即答するシア。もはやスライムが俺の名前だと思っている節がある。……しかし、人間であった頃の名前を現在、スライムである俺が名乗るのは、滑稽に感じた。

(スライム様、か……今の俺には丁度良いかもな……)

ふと、シアの顔を見ると釈然としないような表情をしている。

（もしかして、俺がブロブって呼ばれたことを怒っているのか？）

ブロブと呼ばれるものがどういった生物なのかは知らなかったが、なぜか心の中が暖かい物で満たされるような気分になる。それは異世界と思しきこの場所に来てから、初めてのことだった。

（不幸ばかりじゃないよな、此処に来たことも……）

「あの……シア様、顔色が優れませんがシア様も体調を崩されているのでしょうか？」

シスターもシアが剣呑な雰囲気を感じていることに気が付いたようだったが、其の原因はシアが病気を患っているのではないかと判断したようだった。

「……ええ。最近、魔力が回復できていないもので、ちょっと頭痛が……」

誤魔化すように顔をシスターから逸らすシア。しかし、握りしめられた手は小刻みに震えていた。

（いつそ声を出してでも、気にしていないと言うべきか？）

シアの忠告を忘れたわけではなかったが、どうしても口を挟みたくて堪らなかった。

お互い、利害が一致しているだけの関係と言っても、ここまですべて助けてくれたシアに対してその程度のこととは、して当然なのでは

ないだろうか。

覚悟を決めて、シアに話しかけようとした時

「!? それは大変！ シア様、これをお飲みになってください！ 魔力を回復させる効能がありますので！！」

シスターが取り出したのは、青い小さな瓶だった。

その効果は抜群だった。特にシアのご機嫌を直すには……

「これはありがたいです、……あ、スライム様にも早く救済の手を……」

にやけた顔で瓶を受け取ったシアは、自分と同じぐらいの大きさの瓶を片手で持ち、一気に飲み干す。

ぷは〜と満足げに呷ったシアと、風呂上がりの親父がビールを飲み干す光景が重なって見えるのは気のせいではないだろう。

……そこには、さっきまで俺のために怒っていた様子など微塵も残っていないかった。

(……シアよ、それは無いだろ……)

何となく、空しくなって空を見上げたが、余計に空しくなった。

(……癒しはシスターに求めることにするか……)

自分がシアに渡した物が気に入って貰えたことを確認したシスターは微笑みながら、手を組んで祈り始める。

「判りました……我が聖印よ、大英霊ルシアの教えに基づき、彼の聖宝を顕現させ給え、《シーディントの聖壺》」

眩い閃光が視界を白く染め上げる。だが、俺は確かに目撃した、シスターの手の中に立派な陶器が空間を歪める様にして現われたことを。

「そ、それは何ですか、……水差しのように見えますけど……」

シスターが大切そうに抱えている物体は、水差しに見える。

(……あゝ、頭の容量超えてきたぞ、いい加減)

目の前で起こった怪現象に軽いパニックを起こしかける。

(……フハハ、やってくれるな、ファンタジー系の物理は)

「これこそはわたしが勇者だという証、至宝召喚《シーディントの聖壺》です」

混乱している俺を放って、会話は進む。

「だ、大丈夫ですよね、スライム様にそれを使っても……？」

「はい、大丈夫です。この《シーディントの聖壺》の力ならスライムの救済が速やかに行えます……」

なにか、不穏な気配をシスターから感じたが、気のせいだと思い直して、事態を静観する。

「それは素晴らしいです、スライム様を早くお願いします」

なにか感心したように顔をした後、シスターに早く始める様に促す妖精。

「任せてください。……それでは、始めます」

頷いてから、そっと水差しを傾けるシスター。その顔はまさしく、聖母のような慈愛に満ちた微笑みを浮かべている。

……だが、俺は別の所で心地よさを感じていた。

この水は、先程シアが用意した水よりも遥かに体に染み渡ってくる。

(これは……ああ、さっきまでの苦痛が嘘のようだ)

「おかしいですね、効いていない？」

首を傾げて、一度に掛ける水の量を増やしてくるが、そろそろ全快に近づいてきた俺はどうやって効いていることを伝えようか考えたが、特に何も思いつかなかった。

シアはこっちを見て、嬉しそうにしているが、それとは対照的にシスターの顔が険しくなってきた。

「初めて使う聖具ですが……いささか、伝承とは違うというのはどういうことでしょうか？」

(伝承？ 歴史のある道具に命を救われるとは……幸運だな)

「はて、ケティ。わたしには結構効いているように見えますが……」

シアの目には俺の状態が良くなっている事が判ったらしい。……このまま、シアに任せれば何事もなくシスターと別れることが出来る

と思っていた。次の瞬間までは……

「いえ、《シーディントの聖壺》はかつて屍竜サーバルトを死に至らせた聖水、プロブモドキならば、一瞬で浄化し、灰にしななければいけないはずなのに」

「……………なにiiiiiiiiiiii!!!!!!」

「!!!!!!」

シアと俺の声が見事に重なったが、そんなことには気も止めず、シアがシスターに掴みかかる。

「何を物騒な物、ぶっ掛けてくれますか。ケティイイイイ!!!!!!」

「な、なにか私、間違えていたでしょうか、シア様」

やや戸惑ってシアを見た後、シスターは俺に向かって喋り出す。

「……………その様子だと……………新種ですよ、叫ぶ事が出来るプロブなんて聞いたことはありませんから」

Side シア (いつ戦鎧を落とされてもおかしくない妖精 6歳)

スライム様を助けてもらうために連れてきたシスターことケティは、悪魔顔負けの死神でした。フフフ

って冗談ではありません。誰もスライム様の退治なんて頼んでいません!!!!!!

「何を物騒な物、ぶつ掛けてくれますか。ケティイイイイ!!!」

「な、なにか私、間違えていたでしょうか、シア様」

何を白々しい、ケティの明るい笑顔が妙に怖いですよ

ああ、今、可哀そうな子を見るような目で私を見ましたね!!!  
その目線とは生まれたときからの付き合いですから誤魔化せませんよ!!!!

「……その様子だと……新種ですよ、叫ぶ事が出来るブロブなんて聞いたことはありませんから」

こっち無視してくれるとはやってくれますね、ケティの分際で。

『ふん、叫ぶだけではなく、会話もできるぞ』

むう、スライム様から殺気が漂ってきました……

此の俛、私は静観した方が良いのですかね、私の生存率的な問題で。

「ブロブが悠長に話せる時代が来ましたか。ならば、増える前に救済するまでです」

『失礼な、俺はブロブではないスライムだ。それに救済とは毒を掛けて灰にするという意味だよな?』

「そちらこそ、《シーディントの聖壺》の聖水を毒呼ばわりするのは、何を考えているのです」

バチバチと二人の間に電撃が走っている気がしますが、錯覚でしょうね。たぶん



「シア様の温情を無下にし、聖具を侮辱する言動を見逃すわけにはいきません」

「……ちよつと待つてください……もしかして、今、私、ケティに陥れられています？」

「ちよつと……！！」ケティの所為でスライム様に処刑されるのは勘弁ですよ……！！！！！！

「ケティ……！ 私は貴女にお願いしたのはスライム様を助けてほしいという内容ですけど……！！！！！！」

「はい、私にお任せください、速やかにその魔物を浄化してみせます」

話がつ話が通じていません！？

何処をどうすればそういう結果になるんですか……！！

「違います、浄化ではなく回復ですよ、スライム様に必要な救済とは……！！！！」

「……なんですか、ケティ、その可哀そうな子を見る目（2度目）は

「……シア様、その考えはその魔物にとって本当に救いになるのでしょうか？」

「……これ以外になにかあると、少なくともそつちよりも普通の事だと思えますが……」

「その魔物を此処で治療するのは簡単です。慈悲ヒールの手の魔法を施すだけです。しかし、怪我が治った後の魔物はその後、どのようにして生きていくのでしょうか。生きる糧を求めて罪も無い人々を襲う

ようになるでしょう。……それはとても、とても、悲しいことです。襲われた人はもとより、罪を重ねなければ生きていけない魔物も……」

……あの……スライム様は多分、水と草さえあれば生きていけると思いますよ。基本的にプロブと共通点多いですし。

しかも、人を襲うのは決定事項だと言わんばかりの言い草は不快ですよ。

「ケティ、スライム様はそんなことをしなくても生きていけると思っています。むしろ貴女の考え自体が偏っていると私は感じました」

「え……」

「ケティが自分の考えに自信を持っているのは構いませんが、そのせいでスライム様は死んでいたかもしれないのです。……今回は何事もなかったから良かったですが、ケティはもっと物事を良く考えてから、行動を起こさないと取り返しが付かないことになりますよ。少なくとも、スライム様が死んでいたら、私だって死んでいたかもしれないのです。」

ふう、真面目な台詞はたった一言でも大変疲れるのですよ。さつさとシスターとスライム様を引き離して、私の悩みを聞いてもらいますか……ん？ 妙な悪寒が……

「シア様も、シア様もあいつ等と同じことを言われるのですか!？」

……何か私、心の傷に塩を塗り込んでしまいましたか？

目が怖いですよ、ケティ、出来れば出会った時の明るい笑顔に戻ってください

『シア……逃げようか、全力で』

「何処までも付いていきます、スライム様」

「なんで、なんで、なんで、教会で天啓を受けた私を皆は、認めてくれないのです。どうして、どうして、どうして、勇者になった私を皆は、避けるのですか。だから、だから、だから、私は、正しいと、すべての魔物を滅ぼさないと、ルシア様の教えを守る敬虔な教徒ではないといけないのに」

『シア……なんか、とんでもないのに関わり合いになってしまったようだな。俺たち』

「きよつ教会のシスターと昔、4〜5回程、遭遇したことがありますけどこーいうのは初めてですよ、あはは」

じりじりと後退するスライム様に置いていかれないように付いていかない

『何だ、あれ？』

「へ？」

ああ、ケティたらローブの背中部分にウォーハンマーなんて隠していたんですか〜

気が付きませんでしたよ。……ああ、目が完全に座っていますね。ヤバいです。

side スライム (戦闘経験ほぼ無し) スライム

歴もつすぐ終わるかも)

「ハッ！！！」

必殺の気合いと共に、鉄の塊は一直線にゼリー状の生物に向かって振り落とされる。

「ス、スライム様、避けてください！！！」

『ムハアアアア！！！！』

戦鎧を振り切った体勢のまま、間一髪で避けたブロボモドキを、一瞥してシスターは呟く。

「避けないでください、当たらないじゃないですか」

『テ、テレホンハンマーを受けて死ぬとか、貴様、悪魔か！！！！』

ウォーハンマーを地面から引き抜き、再び振りかざすシスターを無視して逃走を開始する俺とシア。

「！？ 待ちなさい、逃がすか！！！！！」

『シア、俺の触手に掴まれ、その速さでは追いつかれる』

「わ、わかりました、お願いしますううう！！！！！！！」

シアを触手に取り付かせて全力で走る。どうやら全力での早さはこちらが勝っているようだが振り切る程の差は無いようだったが、俺が何度か木に接触しかける度に、差が縮まる。

「ス、スライム様、どうかしたのですか！？」

『いや、全方位を見ながら走るのには慣れていなくて……』

「そんな器用なことをしていないで前だけ見てください！！！！！」

『前だけねえ、お手柄だ。シア』

前だけ見るように意識を集中すると視界が狭くなり、走りやすくなる。シスターとの差は僅かずつだか開いてきた。シスターとの距離が離れていくうちに余裕が出てきた俺は不安材料をなくしたい気持ちからシアに話しかける。

「……で、シア、お前はどっちに付くつもりだ？」

「な、何言っているんですか、私があバサカの狂戦士に取り入るわけがないでしょう!!！」

「……本当にそうか？ 結構、今からでも遅くないと思うぞ。説得も洗脳も」

「根本的な意思疎通出来ない相手に命預けることになるかも知れないなんて、笑えもしません!!！」

「なら……この状態のまま逃げ続けてもいいんだな」

「はい、私はスライム様に全て、お任せします」

(いや……スライムの俺に命預けるつもりか?)

森の中を逃げ回っているうちにシスターを撒けると思っていたが、鬼のような形相で追ってくるシスターは更に速度を上げて、付かず離れずの位置を保持している。

「……あ、だめです。その洞窟は行き止まりになっています!!！」

「!」  
『なら他の所に行くぞ!!!!』

やがて見えた洞窟の手前で方向を変えようとした時、不気味に笑うシスターから手からナニカが放たれる。

「ファイヤーボール  
「 火炎の輝きよ」

「つう!!! スライム様、避けてください!!!!」

放たれた炎は地面に触れた瞬間、膨張して爆発する。不思議なことに草や木に炎の舌が這っても焦げ付かなかつたが、炎が爆発したときに発生した火の粉よって体の一部分が蒸発した。

『ウワー!!』

熱気から逃れるために俺は洞窟に入ってしまう。シア曰く、行き止まりの洞窟へ。

「チイツ、どうしますか、スライム様」

『なんか、いい方法は無いのか?』

話しながら洞窟の奥へ進んだが20メートル程で行き止まっていた。洞窟の中はほぼ、真っ直ぐとした形状でさっきの炎を打ちこまれたらひとたまりもないだろう。

『シアは何か魔法を使えないのか?』

「……使えますけど、目くらまし程度の光しか出せません……」

『上等だ、さっきの炎を放りこまれる前にシスターの目を眩ませて脇をすり抜ける』

「だったら、早めにした方がよさそうです。精神集中が終わり次第、撃つてくると思いますから」

洞窟の入口にはシスターの姿が見える。逆光になって表情は判らないが、恐らくは嗤っているのであるう、シスターの方から不気味な笑い声が聞こえる。

ウォーハンマーを油断なく構え、入口から動かないのは、さっきの魔法を使うつもりだろう。

「魔法の準備できました、スライム様の方は宜しいですか？」

『よし、3秒数えてから始めるぞ、しっかり触手を挿んでおけよ』

シスターも此方が何かしようとしていることに気がついたらしく、ウォーハンマーを構え直す。

「判りました、スライム様も目を潰さないように気を付けてください、では……3」

じりつと、走り出す準備を整える俺と片手をシスターに向かって突き出すシア。

『2』

シスターも魔法の準備が出来たらしく、片手をこちらに向ける。

『1』

シスターの手に再び、炎が生まれる

「ファイヤーボール  
の輝きよ」

「フラッシュアロー  
の発光の矢よ」

シアの魔法の完成と共に走り出す。

『行くぞ、シアー!!!』

迫ってくる火球を紙一重で避けたが、それはシスターにとっても予想の内だったらしく、ウォーハンマー振り被るが、そこにシアの放った閃光が炸裂した。

「くあ!!!」

「スライム様、今です!!!!!!」

一気に距離を詰めたが我武者羅に振われたウォーハンマーを避けるために大きく跳躍する。

シスターの顔の脇を掠める様な軌道を描いてすり抜けるはずが、途中で勢いを殺される。

(しまった、触手を掴まれたのか!?)

失敗したと悔しさが押し寄せてくる中、後ろを振り返ると……シスターの首に触手が絡みついていた。

……凍る俺の時間。

『あゝ、しまった。触手を掴まれたんじゃないやなくて、首に打ち込んだやつたのか……悪いことしたな、シスターには』

「……泡吹いていますけど、手当てしなくても別にいいですよね。

コレ」

シアは無事だったらしくパタパタと自分の羽で飛んで近寄ってくる。

『まあ、死ぬほどではないし、復活されても困るからこのままにしておこうか……しかし』

「? どうかしたんですか?」

「……なんでもない」

俺は命が助かった事よりも目の前の珍事に頭を悩ませる。



(…スライムにラリアットされて気絶する勇者ってどいつなのかね)

## 05 チュートリアル 武器と魔法（後書き）

今回、長すぎたかも……各話、同じぐらいの長さにしたいです（泣

## 06 チュートリアル 魔術品と契約（前書き）

遅くなつてすいません。今回、活きのいい電波が襲ってきたのでや  
つてしまいました。

## 06 チュートリアル 魔術品と契約

side スライム（追剥となった元サラリーマン スライム歴2日）

『シア、次は青い瓶が二つと指輪が三つ』

「おお、ブルーポーション魔力補給薬、まだ持っていましたか。フッフ、幸せ気分です」

『む、本と……これは銀貨か、頂戴しておこう』

「へ〜。ケティも中々、お金持ちだったんですね〜」

『これでこのポーチの物は全部だな』

現在俺とシアは、シスターの撃破した持ち物を漁っていた。

『……そういえばシア。なんで俺たちは山賊みたいな真似をしているのかな』

「そんな事よりも、この指輪を見てください。マジック・アイテム魔術品ですよ!!!」

最初は気絶させたシスターをこのまま放置しても、また追いかけてきそうに怖いからロープで縛ってしまおうとただけだった……しかし、生憎とシアにはロープを常時持ち歩く趣味は無かったため、シスターの持ち物からロープ、もしくは代用できるものがないかと物色したのが不味かった……シスターの懐からシアは見つけてしまったのだ……とても貴重な、それこそこの森の中では手に入らない薬や道具を……

シスターにとつての唯一の救いは、体中を隅々まで弄ったのがスライムではなく、爽やかな笑みを浮かべる妖精だったことであろうか

……

「む。多分ですけど付与された能力は《倉庫》か《書庫》だと思  
います」

「……それは指輪に物を収納できるということか？」

「はい、その通りです。原理は分かりませんが、空間に歪みを作っ  
て金庫代りに出来るそうです」

『《倉庫》と《書庫》だったか？……機能的にどう違うんだ？』

腕を組みながら首を傾げたシアは、両手にシスターから奪った食料  
入りの袋と本をそれぞれ持って向き合う。

(……体の大きさに比べると、結構な怪力だな……)

シアは食料入りの袋を軽く挙げて『不幸妖精の魔法講義 第一回』  
を始めた。

「……え〜とですね。まず此方の食料を保管する場合、長持ちさせ  
るには温度が低くなければいけませんので、収納先が空間も温度が  
低く設定された所に飛ばされる<sup>マジック・アイテム</sup>魔法用品を選ばなければいけません。  
しかし」

食料を地面に置き、本を開いて此方に見せて首を振るシア。

「こういった本を食料用の空間に入れると、本が傷んでしまうこと  
や壊れてしまうことがあるため、本専用に調節された空間に繋がっ  
た<sup>マジック・アイテム</sup>魔法用品が必要になるわけです」

『中身を出す場合はどうやって使うんだ？』

「……………」

……………なぜか気まずそうに沈黙するシア。冷や汗を流しながら目を背

けていたが、やがて脱力した様子で解説を再開した。

「これは人間用ですから、私たちには使えないんです……」  
「……………」

俺はシスターが持っていた指輪の一つを触手の上に乗せて、スライムになった自分の体を呪った。

(ファンタジーの世界に来てマジック・アイテム魔術品を使えないって一体……)

「……………人間だったらオープン《解放せよ》って唱えればいらしいですけど……」  
「オープン《解放せよ》か……………」

ビシッ

小さな音と共に現れたのは木製の箱。装飾が施されていないが中身は相当に重いらしく、箱の下敷きになった小石が割れていた。

「シア、これは……………」  
「すごいです、すごいです、すごいです。スライム様が人間用のマジック・アイテム魔術品を使えるなんて……！」

踊りだしそうな勢いではしゃぎ始めたシアは、風になったかのような俊敏さで箱の蓋を開けて笑い始めた。

「ふんふんふん、ふつふつふつふつふつふつ、おお！これはすばらしい、あはははは。これはこれは、ホワイト・エクリサ神の雫ですな。一度だけ精霊様に見せてもらった事がありますが……まさか、手に入れることが出来るとは……。クッククククククッ」

貴重な薬(？) を手に入れた妖精は両手を天へと伸ばし、高らかに哄笑する。

( 実力さえあれば、明日から悪の大神官が魔王になれるよな、こいつ )

『 ……なあ、追剥の途中で悪いが、もう一度収納するときはなんと  
言えはいいのか教えてくれ 』

「 ……え、あ、そ、そうですね。え〜と、 《封ずる》<sup>シヤット</sup> でいいはず  
です。はい 」

『 《封ずる》<sup>シヤット</sup> …… 』

今度は音もなく消える箱。魔術品の便利さに驚嘆した俺は、その余韻に浸っていたが、シアの懇願するような声で我に返った。

「 スライム様、どうか どうか、これを開いてはもらえないで  
しょうか！ ……！ 」

シアは次の指輪を持ったまま涙目になっている。 …… なにも知らない奴が見れば中々に可愛らしいと思うのではないだろうか …… 妖精の口から滝のような涎さえ流していなければ ……

『 …… わかったよ、それを貸せ 《解放せよ》<sup>オープン</sup> 』

さっきよりも一回り小さい箱が現れる。 …… そしてすぐさま飛びつくシアだったが、心なしかさっきよりもテンションが低いようだった。

「 本ですか、魔導書のようですね …… 」

『さつきとは随分と違う反応だな』

溜息を吐きながら本を捲る妖精……明らかに肩を落としているが、それでも物色する手が止まらないのは盗賊の鏡だと言える。

「魔法よりも薬やその材料の方が心ときめくのですよ。……私の場合……」

『……そうか。それはそうとして、この指輪にはどれ位の量が入るんだ？』

「魔力触媒に上等な魂溜石マキア・コアを使っているので40キロは入れることが出来ると」

『ちよつと待て、キロだと？』

キョトンとした顔をして手を休める妖精を凝視しながらも、俺はシアが使った言葉について考え始める。

「……はい、キログラムです。至宝にまで成るような魔術品マジック・アイテムだったらトンもあり得ますが……」

（今までシアやシスターと会話出来ている時点で気が付くべきだったが、なぜ異世界で俺の言葉が通じる！？ それとも此処は日本なのか！？）

「……あの、スライム様はこの指輪の性能を物足りないと思っているようですが、これでも中々の業物」

『此処は何処だ』

「……へ、此処ですか？」

突然の俺の問いに答えられないまま、硬直してしまった妖精の両肩を触手で掴んで揺さぶる。



「　　ちよつちよつと、止め、揺さ、助け　　！！」

『何で、シアがキロとトンを知っているんだ！？』

side シア　（追剥となった妖精　6歳）

『此処は何処だ』

……いきなりスライム様が記憶喪失になったかと思いました。

大体ですね、2日前に生まれたスライム様に失うほどの記憶があるのかは疑問ですが、私との約束まで忘れられていたら絶望死しちゃうですよ。

「　　……へ、此処ですか？」

ああ、触手が迫ってくるのに体が動きません。

きっと今の私の顔は随分な間抜け面をしていることでしょう……

つてこんな所で、意味の分からず処刑されるわけにはいきません！！！！

スライム様には悪いですが、此処は一発殴つてでも正気に戻って頂かないと

がしっ！！！！！！

……ふえ……両手両肩を見事に固められましたね。

大変です。此処で私は死んじゃうかもしれません……

つてこんな所で、意味の分からず溶かされるわけにはいきません！

！！  
スライム様には悪いですが、此処は魔法を使つても元に戻つて頂かないと

ブンツブンツブンツブン！！！！！！

……ヒヤア……体が上下左右に揺さぶられていますね。  
拷問です。此処で私は死にますね。はい……

「 ちよつちよつと、止め、揺さ、助け ……！！」

ああ、きつとスライム様は、私が欲深なのが気に入らなかつたのでしよう。でもですね、シアは後悔しません。あれだけのお宝に目を輝かせないシアは鱗の無いドラゴンと一緒にのですよ……でもそれ以外の理由だつたら……マジック・アイテム魔術品の説明で何か不備でもあつたのでしようか。

『何で、シアがキロとトンを知っているんだ！？』

そつちでしたか！！！！！！！！

そんな理由で殺されたくないです！！！！！！！！

「ス、スライム様、私だつて賢者の測量法則ぐらい知っています！！！！！！」

と、止まりました。あの地獄の揺さぶりが……シアは、シアは生きています！！！！！！

『賢者の……測量法則だと！！！！！！！！』

……うわ、下手したら拷問再開になりそうですね。

……話を途切れさせないようにしないと　　！！！！

「はい、だからメートルもミリもセンチも知っています！！！」

スライム様は考え込んでいるようですが、油断はできません！！！！！！

知っている限りの情報を喋らないと揺さぶられるか、最悪の場合、溶かされるかもです！！！！！！

「この場所はフラウ大陸の中央部、魔族と人間の国の境界線となっているディラル山脈のアクラスの森です」

『フラウ大陸……？』

「そうです、世界で二番目に大きな大陸です！！！！！」

な、なんとか命を拾えそうですよ。あと賢者の測量法則さえ言っておけば完璧ですね。

「そして賢者の測量法則のことですが、これは異世界からきた賢者が考案したという重さや長さを表すための決まりみたいなものです」

『異世界……賢者……』

何となくですが、スライム様の顔色が悪くなっています。　　い

ざとなったら神の雫ホワイト・エクリサを使っても治さないと　　！！！！

『あ、いや、済まなかったな。……俺としたことが取り乱してしま  
った』

……ふう、正気に戻って頂けたようですね。触手も引っ込めてくれましたし、問題なしですよ。

「……大丈夫です、それよりもそろそろ移動しませんか。……食料と薬は十分に補給出来ましたし」

ふっふっふっ、《収納》の指輪をスライム様が使えるのは驚きでしたが、便利な道具が使えるのは心強いですよ。

『……シスターはどうするんだ？』

……え、おお、忘れていました。縄とか鎖とか手錠とかの代わりになりそうな物もなかったですし、どうしましょうか……

「ケティですか……正直、このままでもいいと思いますけどね……」  
『念のたぐいに対策はしておくべきだろう。あの火の玉は怖すぎる』

むむ、確かにそうですね。背を向けた瞬間にファイヤーボールが撃たれたら炭焼きになってしまいますし……

「しかし縄も代わりになりそうな物もなかったですし、始末に困りますね……」

『魔法で何とか出来ないのか？』

……シアは妖精の中でも魔法が苦手な青草リーフ・フェアリーの妖精なのですよ……  
まあ、それを理由にして訓練をサボっていたのが一番悪かったと、大人になった今なら言えますが。

「生憎とそういった魔法は持ち合わせていないのですよ……」  
『さっきの本には何か使えそうな魔法は無かったのか？』

おお、そうでした。さっきの本に何かあるかも知れません。

「あつ……あの魔導書ですか、ちょっとお待ちください」

え〜と、さっきの騒ぎでそのままになっていましたか……

分厚い本は嫌ですね。枕か虫叩きとして活用したいのによったら皆や精霊様に怒られますから……

……フムフム、お、あつた。

「スライム様、丁度良い魔法がありました。契約方法も口述のみですのでお手軽そうです」

side スライム (魔法に興味のある元サラリーマン スライム歴2日)

『契約……?』

シアが魔導書の中から探し出したのは<sup>バインド・ローブ</sup>《束縛》という魔法だった。

「契約とはですね、自分の魂に魔法の詠唱文章を刻み込んで<sup>力ある言葉</sup>起動語を唱えるだけで使える状態にすることですけど、契約方法には様々な形式がありまして……例を挙げますと、魔法の詠唱文章が書かれている石板に触れる。精霊や神様に取り入って魔法を貰う。魔獣や魔族を討取って生贄にする。滝に打たれる。石を頭突きで割る。水を飲む。火の中に手を入れる。体の中に金属片を打ち込むなどがあります」

(……どっかの修行僧が喜びそうなコースが揃っているな……)

『……今、妙な方法があったような気が……』

「気のせいですよ。特殊な所になると、特定の勇者の子孫であることが条件とか、至宝の持ち主しか使えないとか、生まれた日の星座に左右されることがありますね」

『シアの魔法はどんな契約だったんだ？』

「え、フラツシユアローはですね……」

シアは遠い目をしながら思い出に浸っているようだった。

「光輝石と呼ばれる魂溜石を光あれと叫びながら頭突きで割るのが条件でした」

『……悪かったな。嫌なこと思い出させて』

体育座りして泣き始めた妖精を何とか励まして《束縛》の契約について説明を受ける。

「ルシア教の聖書に書かれた一節、霧の魔狼ビツバスを勇者の従者ヘンリーが縄でとらえる場面を、この魔導書に触れながら唱えるだけでいらしいです」

『……宗教色が強いな、おい』

「元々、教会の魔法ですから……」

本を二人で持ちながら何度も深呼吸する。

「じゃあ、私の後に続いて声を出してください」

『了解だ。いつでも始めてくれ』

「銅の手と比類なき勇気を持つヘンリー」

『銅の手と比類なき勇気を持つヘンリー……』

「汝は聖なるルシアの2番目の従者なり」

『汝は聖なるルシアの2番目の従者なり』

( 宗教アレルギーが起きそうな文句だな…… )

「 汝は弱き者の命を散らす、かの魔狼の牙を恐れなかつた者」

『 汝は弱き者の命を散らす、え、かの魔狼の牙を恐れなかつた者』

「 汝は狼の住まう霧の樹海の門を開け」

『 汝は狼の住まう霧の樹海の門を開け』

「 狡猾なる森の術を右耳と右目を代償に潜り抜けよ」

『 狡猾なる森の術を右耳と右目を代償に潜り抜けよ』

「 戦士の咆哮を口にしてはならず」

『 戦士の咆哮を口にしてはならず』

「 叫べばビツバスの浅き眠りは硝子のように罅割れる」

『 叫べば……ビツバス？の浅き眠りは硝子のように罅割れる』

「 縄を放て、ルシアの血と祈りにて編まれた縄を」

『 縄を放て、ルシアの血と祈りにて編まれた縄を』

「 霧の魔狼の首を掻き毟る汝の剣は、何れかは至宝として呼び出さ

れるであらう」

『 霧の魔狼の首を……掻き毟る汝の……剣は……何れかは……至宝

として呼び出されるであらう』

「 だが、今は汝の勇気の証として聖なる縄を称えよう」

『 だが……今は汝の勇気の証として……聖なる縄を称えよう』

「 願わくは、ルシアの教えを守る子らにこの聖具が宿らんことを…

…」

『願わくは、ルシアの教えを守る子らにこの聖具が宿らんことを』

「これで終わりです」

( やつと終わったか……面倒だな、契約って )

特に変化のない自分の体を見つめていると不安になってくる。

『シア……成功、したんだよな』

「む、使ってみれば分かりますよ。シスターに」

『なるほど、どうやればいい?』

「多分ですね、縄を思い浮かべて唱えるだけで宜しいかと」

( 縄か……そういえば、子供の時のお仕置きにあったな、縄で宙づり…… )

『 バインド・ロープ  
《束縛》……… 』

子供の時のトラウマを思い出しながら放った魔法の効果は抜群だった。

光で出来た幾重もの縄がシスターの体を雁字搦めに縛っていく。

……その際に、シスターの意識が戻ってしまったのはご愛敬だろう。

「此処は……そうだ、私はあのプロブに……」

目が覚めて、気絶するまでの記憶を思い出したらしいシスター。挨拶代わりに触手を振って声を掛けてみる。

「プロブじゃない……スライムだ」



「…………ふははははは、ケティ、ようやく目覚めましたようですね。残念ながら貴女の荷物は私たちが頂いていきます！！！！！！！！」

（本格的に山賊始めるようだな…………この妖精）

高笑いする妖精と戦慄したシスターを交互に眺めてから深い、深い溜息を吐く俺であった。

## 06 チュートリアル 魔術品と契約（後書き）

盗賊ルートには入るつもりはないとだけ言ってみたい。……信じて  
ください。

## 07 チュートリアル 勇者と魔王軍（前書き）

またしても投稿が遅れてしまいました。なんかお気に入り登録の数も増えているし、……本当に恐縮です。

## 07 チュートリアル 勇者と魔王軍

side ケティ・ベルトケン (英雄序列683位の僧侶 19歳)

『……おめでとう。ケティ、貴方には勇者になる権利が発生しました』

……これは……懐かしい……昔の夢だ。

『かつての英雄ベレネアの至宝《シーディントの聖壺》を召喚するとは……人生とは常に予測のつかないものです』

これは私の分岐点になった記憶。勇者ケティ・ベルトケンと臆病で孤独なケティ・タリウカ……1つを捨てて、1つを選んだ記憶。

『天を駆け廻る、我らが戦王妃ティンスルト様からの賜った重要な……試練ですが、あまりにも無理難題だと挑戦者が判断した場合は……辞退する事も許されています』

私の力で幸せになれる人が居るのだったら、私は勇者になります。

『……確かに、確かに貴女の活躍で助かる人が居るかもしれませんが同時にこの孤児院に残される家族が居ることも忘れないでください』

弟たちや妹たちの事は気掛かりですが……しかし、私は勇者に……勇者になりたいのです。

『頑なですね。そこまで……この場所は気に入りませんでしたか……』

我が第三の父、グリバフオンス神父　　貴方が来てからこのタリウカ孤児院は変わってしまいました。……リユスネお父さんが今の此処を見たら、なんとお嘆きになられることか……。

『リユスネ……神父ですか。……忘れなさい、異端者の前任者の事など……』

リユスネお父さんが異端者ですって？……そう仕立てたのは『主神派』の貴方たちでしょう！？

『異端者であった事は確かなことだ。君だってあの男の異常な『教育』を受けただろう……』

ふん、『主神派』が改編した聖書とやらを使わなかった父は正しい。結果が生まれる前に努力や失敗という工程があったということ……決して初めから万能ではなかったルシア様やそれに続いた英雄たちの歴史を歪めて何が楽しいのです！？

『……問題のある発言だな。血と鉄の掟に支配された聖書を子供たちの前で説き聞かせることが正常とは……ハハッ、だからリユスネにも、貴様にも……味方が居ないのだ』

それがどうした。父の優しさを忘れて玩具とお菓子目当てでお前たちの本を手に取った馬鹿共のことなんか、私は知らない。

『フッフ、面白い本音だな。ケティは弟たちや妹たちの事は気掛か

りなのではなかったのか？』

気掛かりですよ。このままだと『主神派』の都合の良い幹部が此処から生まれそうですから。……でも大丈夫ですよ。欲に目が眩んで改宗した連中ですから……『主神派』の内部から賄賂と職権乱用で滅茶苦茶にしてくれませよね。

『……以前から、再教育は無理だとは思っていたが　まさか此処まで毒されていたとはね……。愚か者だよな、君は』

それでこの話は終わりですか？……だとしたら出発の準備をしなくてはなりませんので……サヨウナラ、グリバフォンス神父。

『嗚呼、その前に一つ命令がある。……ケティ・タリウカという名はもう君には相応しくないから二度と名乗るな。ベルトケン……ケティ・ベルトケンが愚かな選択をした勇者殿に我々が送る最後の贈り物だ』

ケティ・タリウカはリュスネ・タリウカから貰った大切なモノ……意味もなく他の名に変えるつもりはありません。

『意味がない？……フツハハハハ……規則にもあるだろう。本来の親が発見された時はその名を受け継ぐと、お前の第二あの異端者の父とやらが決めたことだろう！』

私の……本来の親？

『そつだ……お前の本当の親は　！！』

……いやだ、思い出したくない。もつと違う夢を、もつと楽しい思い出を。

『……ケティ・ベルトケン……何か質問でもあるのか？』

……これは、つい最近……2週間前の作戦説明室ですか……

「はい、司令官殿、今回の魔族領威力偵察作戦「セスカの風」の注意事項には、アクラスの森周辺で確認されている大型モンスターへの接触は禁止とされていますが、どういふことでしょうか？」

『ケティ君……君は王立イリーズ英雄育成学校で何を習っているのかね？……序列356位バンクラフト・ヴォーケン……今回の樹海<sup>フォレスト・ジャイアント</sup>の巨人への接触禁止令が適用された理由を述べてみよ』

『ハツ……ディラル山脈のアクラスの森には2000年前から風の精霊が棲んでいます、精霊が一か所に留まる時は人間やモンスター<sup>フォレスト・ジャイアント</sup>と契約を交わして守護者とする事例が多いため、今回の樹海の巨人も守護者である可能性が高いです。……そのため接触禁止令は精霊と敵対しないための適切な処置であると言えます』

「しかし、しかし、樹海の巨人が守護者であることは誰も確認されていません。場合によっては魔王軍の手先である可能性も視野に入れなければならぬのではないのでしょうか！？」

『……ふむ、統合本部の判断に異を唱えるか。……流石は『狂人』リユスネ・タリウカの愛弟子……我々とは考え方が違うな』

『異端者の弟子か……それが我々と同じ勇者を名乗れるのか……』『大人しくしていればいいのに……同じ隊にはなりたくないな』

『冗談じゃないわよね……あれが私よりも上位なんて……』  
『……意味も無いのに質問するなよ……時間が延びる……』

「!?!? 父は狂人ではありませんし、私の考えも間違えてはいないと思います!!」

『よろしい。では序列683位ケティ・ベルトケン……君に特殊任務を与える。内容はアクラスの森の樹海の巨人が魔王軍に関わりがあるのか調査すること』

「……判りました。ケティ・ベルトケン……その調査任務をお受けします。詳細をお聞かせ頂けますでしょうか？」

『期間は無期限、人員は君一人、装備は収納系の魔術品を4点まで支給する。くれぐれも精霊の機嫌を損ねないように注意しろ』

「わ、私一人ですか!?!」

『何か問題でもあるのかね?』

「通常ならこういった任務の場合は4人から5人のパーティを組むはずでは……」

『通常ならな、しかし精霊の心証を害さない為にも出来る限り低人数で行うべきだと判断した』

「魔王の配下だった時は一人でどうすればいいのですか!?!」

『……その時は私に通信を寄越せ。周辺の勇者を援軍に回してやる』



もっとも、そうなる状況にはならないと確信しているがな。

嗚呼、そうだ。私は此処でも味方が出来なかったんだ……そして。

光が生まれて、大きくなって、包まれていく。

夢はもう終わりにして現実に、希望に満ちた明日へと行かないと

……

「此処は……そうだ、私はあのプロブに……」

「プロブじゃない……スライムだ」

「……ふははははは、ケティ、ようやく目覚めましたよですね。残念ながら貴女の荷物は私たちが頂いていきます……!……!……!」

……なんで、こんなことになったのでしょうか？

side スライム (魔術師見習い スライム歴2日)

「プロブじゃない……スライムだ」

「……ふははははは、ケティ、ようやく目覚めましたよですね。残念ながら貴女の荷物は私たちが頂いていきます……!……!……!」

(……火の玉が飛んでくる前に逃げるとするか)

触手を軽く振ってシアに逃走の合図を送る。

「私達を恨むのは筋違いと言うものですよ。貴女が祟るべきものは衝動的暴走した自分自身ですよ!!」

じりじりと悪役の台詞を吐きながら後退するシア。その際に戦利品を手早く回収する様は一端の盗賊とも言える。

「ま、待ちなさい。そう簡単に逃がしません!!」

芋虫のように転がりながら此方に顔を向けたシスターは、目を瞑りながら魔法を放つ準備を始めようとして……失敗した。

「……そういえば、スライム様はケティが暗殺拳法に興味があるって知っていましたか？」

たった一言の不幸妖精の証言によってあっさりと。

「シア様が何でそれを まさか!!」

『……本当か、それ……』

「ハイ、さつき開いてもらった指輪の中に一冊だけ混じていたのですが、『図解 素手での暗殺、六十六手』というものがありました。多分……まだ開いていない指輪の中に『本命』があると私の勘が告げています」

『どういう意味なんだ、それは?』

(シア、ナイスだ。あと20秒は時間を稼ぐ事が出来そうだ)

魔法を妨害されたシスターは自分の荷物物の大半が消えている事に気が付いたらしく慌てている。どうやら魔法を使ったための精神集中を行うことはもう無理そうだ。

「なんで魔物が魔術品を使える　　！！」

いきなり押し黙ったシスターは自分の体……に巻きついているバインド・ロープの光をまじまじと見つめている。

「これ……まさか、バインド・ロープ《束縛》の魔法ですか？」

『その通り、結構良い魔法だな。これからも重宝させてもらう』

「教会の、法儀魔法の一つなのですよ、この魔法は魔物に使えるはずが　　」

「スライム様にそんな常識は通用しませんよ」

『シア……そんなことよりも話を元に戻そうか』

するとシアは本が納まっていた指輪を両手で掲げながら話し始める。

「ふっふっふ、ケティは整理好きのようで道具や装備がちゃんと分類されていました。この指輪の中には魔導書や旅に必要な知識が書かれた本などがありましたがおかしいですよ〜この中に『趣味』の本が混じっているのは……多分ですけど、まだ開けていない指輪の中にこういった『趣味』の本を納めていたのですが、入りきらずにこっちの中に入れていたのではないかと思えます」

『一応、確認したいのだがシスターにとって暗殺拳法は必修項目では無いんだよね？』

「くうっ魔物ごときがアルバーンの神官を何だと思っている！？」

烈火のごとく喚き散らす芋虫神官を眺めながら確実に距離を離していく。……火の玉の射程は恐らく30メートル程度だと俺は推測していたが、今はまだ5メートルしか離れてはいなかった。

「スライム様、もうそろそろ……よろしいのでは？」

『……まあ、あの状態じゃ魔法も使えないよな……逃げるぞ！！』

「え、ま、待ちなさい!!」

触手でシアを掴み、走り出そうとしたが出来なかった。シスターに背を向けて再び逃走を開始しようとした俺の前方600メートル先に……15メートル位の鎧を身に付けた人型が音も無く現れたためである。

巨人は周りを見渡しながら俺の前を横切るようにゆっくりと歩いている。

『……………』  
『……………』  
『……………』

沈黙したままその場で凍る三人、やがてシアが震えた声で言った。

「樹海の巨人だ……………」

目に涙を浮かべながら腰が砕けたように座り込むシアと巨人を見ながら考え込む。

フォレスト・ジャイアント

(樹海の巨人……………どう考えてもスライムが敵う相手ではないよな……結構近くに居るし、洞窟の中でやり過ぎすか?)

シアは戦意喪失中……………シスターは驚いた様子で巨人を食い入るよう見つめていたが、やがて大きく口を開けて叫んだ。

「あの鎧……………魔王軍の紋章が……………ブホッ!!」

『音を出すな、あれに気が付かれる……………シア!』

シスターの口を触手で塞ぎ、未だに立ち直れないシアに声を掛けたがなにも反応を返さないままにいる。

『チィ、しょうがない。こうなったら……』

シアに触手を巻き付けて洞窟の奥に移動しようとしてシスターと目が合った。

『……一時休戦するか？』

「なんで魔物とー!」

『今だったら移動の手伝いとバインド・ロープの解除の2大特典付き……』

シスターは心底侮蔑しきつた顔で勇者としての威厳と尊厳を保とうとしていたが、バインド・ロープの光に絡まって倒れている姿で威張られても対応に困るだけだった。

「誰がそんな幼稚な取引に応じるものですか、すぐにこの程度の縛りなど振り解いて見せます!」

『……そうか、頑張れよ。どうやらあの巨人もこっちに気が付いたようだから……討取って名を上げるか、食べられて生贄になるのかはシスターの努力次第だ。……最も光る芋虫状態で勝てる相手ではないと思うがな』

「え」

さっきまで横切るように歩いていたはずの巨人が方向転換して此方に向かって来るのが見える。確実に此方の事が発見されている。なぜなら

(光る芋虫が傍に居るからな、こんな何も無い森の中じゃ悪目立ち

するよな……)

「え、あ、え、ええー！ー！ー！！！！！」

『さらば勇者ケティ 君の事は忘れない。とにかく頑張るべし、中に居る俺達の事を奴にばらさないようにするべし。以上。』

(……あの巨人が洞窟の前で根競べ開始されたらどうしようもないな)

シアを抱き上げて洞窟の奥に移動する俺をシスターは泣き出しそうな顔で見送っている。あれだけ盛大に啖呵を切った後で弱音は吐けないといったように。

(しょうがないな、最後にもう一回だけチャンスをやるか……火の玉を使えるのはシスターだけだし出来る限り役に立ってもらおう)

side ケティ・ベルトケン (光る芋虫 19才)

……なんで、こんなことになったのでしょうか？

プロブには魔法を奪われ、シア様には荷物を奪われ、樹海の巨人には今、命を奪われる所です。

アルバーンを始めとする六大王家に所属する勇者には三つの特権が許されています。

一つ目は王立イリーズ英雄育成学校への入学又は騎士団への入隊の権利を得ること

二つ目は高価な薬剤や魔術品を安価で入手出来ること。任務によっては支給される時もあります。

三つ目……正義や信念よりもこれ目当てで勇者を目指す人が多いぐらいです。

……確かに普通ならあり得ませんけどね。死者の復活なんて……。私は、死者蘇生の権利を聞いたときに感じた物は単なる吐き気でした。

魔法が日々進歩していく事自体はとても素晴らしいと思います。しかし、同時にこの世には触れてはならない領域があるのではないかと私は思うのです。

復活の儀式の際に必要な契約書を手渡された時 無意識に私の口は拒否の言葉を紡いでいました。

驚きに顔を染め上げた大神官の顔は今でも鮮明に記憶に残っています。

その日、自室に戻った後で自覚のしないまま自分なりの信念を貫けた事に枕を抱えながら笑った事もはつきりと覚えています。

しかし、果たして本当にそれは正しかったのでしょうか？

目の前に樹海の巨人が迫ってきました。いつか見た魔獣大全に書かれた通り足音は無く、地面も揺れていませんが……私を磨り潰すと言わんばかりの殺気だけは巨人の存在を確かなものにしていきます。

「うそ、いや……死にたくない」

『シスター、最後にもう一度聞きたい。……手を組んで仲間になるのか、このまま反撃も出来ずに殺されるのかを』

プロブがまた私に取引を持ちかけてきましたが悪魔の囁きに耳を傾けるわけにはいきません。

「勇者が魔物と一緒に戦えるはずがないでしょう……さつさと逃げれば良いのではないですか？」

『一応命の恩人だからな。何もせずに見捨てるのは仁義に反するということものだ』

「ははは、ブロブが仁義を語りますか……」

『おかしければ笑え。こんな俺にでもな、いくら馬鹿にされても大切にしたい誇りがあるんだ』

「……」

ブロブにもあるのですか。迫ってくる巨人の恐怖よりも優先すべき誇りが……むしろ、このブロブだからこそこんな事が言えるのかも知れませんが……。

「判りましたよ。手を組みましょう。……奥まで速攻で運んでください。自分の力では移動できませんから」

『……感謝するシスター』

触手を使って私を運び込もうとしたブロブに突然、影が覆いました……。

『……お早いご到着で……もしかして俺達……悠長に話しすぎていましたか？』

「早く洞窟の中に……」

慌てて逃げ出したブロブ……どうでもいいですけど地面を引きずられるのは初めての体験です。

樹海の巨人はゆっくりとした動作で両手を組んで振り上げる。

そして、放たれた一撃はこの静かなアクリラスの森に轟音を響かせた。



## 07 チュートリアル 勇者と魔王軍（後書き）

行き成りですが、此処で次回予告！！

巨人に追い詰められたスライムとその仲間たち、彼らはどうやってこの難局をのりきるのか？

そして謎に包まれたシスターの『趣味』の本の全容とは？

勇者アル、頼りになる仲間たちとともに森に潜む巨悪に挑む！！

……電波風味はお嫌いですか？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7676j/>

---

スライムの咆哮

2010年10月19日22時25分発行